29. 伊達氏の故地伊佐荘中村とは何処か

問 伊達氏の故地伊佐荘中村とは、現在の何処なのですか。

答 伊達氏は、藤原鎌足から出た家系とされています。即ち

鎌足－不比等－房前－魚名－鷲取－藤嗣－高房－山蔭－中正－安親－為盛－定任－[実宗]－季孝－家周－光隆－[朝宗]〔伊達第一世〕－宗村－義広－政依－宗綱－宗基－行宗－宗遠－政宗－氏宗－持宗－成宗－尚宗－稙宗－晴宗－輝宗－政宗－忠宗－綱宗－綱村－吉村－宗村－重村－斉村－周宗－斉宗－斉義－斉邦－慶邦

「伊達略系」（作並清亮）に『実宗公　一説公於常陸国領采地住真壁郡中村』、「東藩史稿」(1)巻之1（作並清亮）にも同様の記事あり、「寛政重修諸家譜」(2)巻第762の「藤原氏山陰流伊達」の項にも『実宗常陸国真壁郡伊佐の庄中村に住するがゆへに、伊佐あるひは中村と称す。〔中略〕実宗（さねむね）　常陸国真壁郡伊佐中村に住す。これより伊佐と称し、あるひは中村をもって称号とす。』とあります。武士の在地名といい、その本拠とした地名を苗字とし、住地を転じた時はその地名を取って苗字を変えたことは、鎌倉時代まで行われた風習でした。後に、文治5年〔1189〕朝宗(3)が陸奥国伊達郡を賜り、伊達氏を称することになります。さて、伊佐あるいは中村を苗字とした実宗の在地伊佐中村は、現在、茨城県下館市の市域に入っています。

下館市は、茨城県南西部の市で、昭和29年3月15日、下館町と中（お）・五所〔ごしょ〕・河間〔かあび〕・大田・嘉田生崎〔かたおざき〕5村とを合併し市制、市制直前に竹島・養蚕〔こがい〕両村も合併した所であります。常陸伊佐荘について「伊達行朝朝臣勤王事歴」巻之1（大槻文彦）(4)に『常陸ノ伊佐ノ地ハ、古ヘ新治郡（ニヒバリ）ニ属セシカド、後世、真壁郡ニ入テ、其下館町以北ノ地ヲ、近頃マデ伊佐荘トイヒキ、中村ハ、後ニ、中館村ト称シテ、下館町ノ北ニアリ、村内ノ丘陵上ニ遺址アリ、朝宗君、為宗君等、中村氏、伊佐氏、世々ノ住地ニテ、後ニ、行朝朝臣が、伊佐太郎トイフ者ト共ニ籠城セラレシ伊佐城モ、此処ナリ、』とあります。また、中村・伊佐城址については「大日本地名辞書」(5)（吉田東伍）に、次の記事があります。

『中村　今中村と云ひ、中館、谷部（ヤベ）、折本（ヨリモト）、石塔（イシダフ）等の大字ありて、中館を以て其主部とす、下館の北二十四町、勤行川の西辺なり。又上館は中館の北三十余町、大字樋口（ヒグチ）をば其遺址とつたへり、芳賀郡久下田町に近し。郡郷考云、伊達系図に、常陸入道朝宗（念西）伊佐郡中村に住すと注す、中村とは今の中館なり、其墳塋〔ふんえい。墓〕存す。

○　新誌云、文治中、藤原時長、常陸介となり下向す、一名朝宗、其女は大進局と称し、時に鎌倉の営中に候す、源頼朝見てよろこび、密に之に通ず、同二年〔1186〕二月、男子を生む、時長在任の間なり、〔東鑑〕後入道して念西と称し、田園につきて伊佐の中村に留住す。奥州の

役に、子息四人と共に、伊達郡篤借〔あつかし〕山の辺に於て勲功あるを以て、伊達郡の地頭職となり移り住す、伊達氏の始祖なり。〔東鑑、臥雲日件録、伊達系図、按に、日件録に、念西さきに上総に住すとあるは、誤なり〕

○　享保中伊達吉村鹿島紀行云、文治のころほい、我祖常陸入道念西の住み給ひしは、今の真壁郡中村の庄なり、(6)此処より十余里隔て遠ければ、見ずして過る、いと本意なし、かの朝村〔朝宗〕主の、「かりそめと思し」〔ひたちの国に侍りける時よめる　かりそめと思しほとにつくはねのすそわの田井も住なれにけり〕とよみ給しは、新拾遺に入侍る、これかれ昔の事を思出、見ぬ世の事もなつかしかりければ、

近からは行きて見ましを筑波根の裾輪の田井の世々のふるさと。

新詩補云、近世所書の常陸大掾系図に、多気大夫維幹の二男為賢を、伊佐氏の祖とするは、附会の説なり、中納言藤原山蔭より出づ、山蔭六世孫実宗、康和〔1099～〕の初め陸奥守となり、鎮守府将軍を兼ぬ〔外記日記〕天永二年〔1111〕、常陸介に遷る、永久二年〔1114〕、鹿島宮を造る〔春日験記〕実宗初て伊佐中村に居る、因て中村を氏とす、子秀宗、徙〔うつり〕て山尾に居る、世山尾蔵人と称す、又下野守に任じ、芳賀郡に居り、氏に因て其地名を中村と改む、任満て伊佐庄下館に還り居る、世下館侍従と称す、子助宗嗣ぎ大舎人たり、子光隆、其子朝宗、蔵人たり、父祖並〔ならび〕に待賢門院（鳥羽妃）高松院（二条妃）に事ふ、朝宗亦高松院に仕ふ、其妻は源為義の女たり、故に頼朝の興るや、鎌倉に来り、亦伊佐庄に居る、子為宗先没し、其弟宗村嗣ぎ、常陸介たり、亦伊佐荘中館に居る、〔伊達便賢志〕朝宗、常陸入道念西と称し、〔東鑑〕和歌を善す、其高松院桜花の詠、藤原家隆の為に嗟賞〔さしょう〕せらる。〔著聞集〕

伊佐郡　中世の私称号にして、新沼西郡の北条と云ふにあたる。其地は今の伊讃〔いさ〕村、下館町、中村、五所村、河間村、養蚕村、竹島村等にあたる。此郡号も文禄検地の時停止せられ、真壁郡へ併せられたり。

新編常陸国誌云、伊佐郡と書きたるが物に見えしは、北条九代記に、「六波羅南方、北条左近将監時国、弘安七年〔1284〕六月、下向常陸国伊佐郡、十月被殺」と見えたるぞ始めにはありける、伊達系図、常陸入道念西の伝にも「住伊佐郡中村」と見えたり、中村は今の中館なり、伊佐氏あり即伊達氏の同族なれば、今の下館城は古の伊佐城にして、即伊讃郷なり、是城のほとり、三十余村、今に至て伊佐庄と称す、これ古を忘れざるなり、〔中略〕新拾遺集に伊達行朝（作名朝村）がこゝに居たりし時の歌あり、「ひたちの国に侍りける時よめる、藤原朝村、かりそめと思しほとにつくはねのすそわの田井も住なれにけり」〔下略〕

伊讃郷（イサ）　和名抄、新沼郡伊讃郷　今真壁郡伊讃村、五所村、下館村、中村にあたるべし。〔中略」中世伊佐郡、又伊佐庄などといふ、為宗の曽孫伊達行朝、祖先の旧地なるを以て、延元〔1336～40〕興国〔1340～46〕の間、六年籠城して、勤王せし処なり。今近地卅五村を伊佐庄と云ひ伝ふ、即古郷中の地なりしにや。

伊佐城址〔上略〕伊達行朝勤王事歴云、伊佐城址は、下館町の北凡二十町なる、中館村の民家の聚落を成せる処にあり、関城書考には、下館町を伊佐城なりとし、郡郷考には、伊佐山村其跡なりとしたれど、共に非なり。中館村古へは中村と称して、伊達氏の太祖中村朝宗君、及び子息伊佐為宗君以下、代々の住所にて、城址は一帯の長陵の上にあり、此長陵北より南へ走ること数里なり、其南端を下館城址とす、〔中略〕さて伊達系図に朝宗君の長男為宗君は、伊佐を領して伊佐氏を称すとあり、又三男資綱君は「常陸三郎、常陸蔵人、中村庄本主、属兄為宗在中村」などとあり、然して「次男為重君（改名宗村）四男為家君は、吾妻鏡に伊達次郎、伊達四郎」など、あり、伊達系図には、「為家、伊達蔵人、属兄宗村、在伊達」などとあり、蓋朝宗君の伊達郡を得られし時、本領なる伊佐の地は、安堵故〔もと〕の如くにて、長男を伊佐に留め、其内を三男にも割与せられたりと見ゆ、為宗君は皇后宮大進を称せられぬ、子息あり大進太郎と称せり、執権次第、北条九代記等に、弘安七年〔1784〕北条左近将監時国伊佐郡に流されし事を記せり、此囚人を召預けられし人も、為宗君の裔なりしならむ、其後延元、興国年間に至りて、伊佐太郎と称する者ありて、伊佐城に居る、伊達行朝朝臣と共に籠城勤王したり、〔中略〕行朝朝臣の伊佐城に入られしこと、南方紀伝と関城書とに見ゆ、二書共に正保〔1644～48〕の頃に、何人か白河文書を拾綴〔しゅうてつ。拾う〕して作りしものと思はれ、書中に年月日の錯誤はあれど、其材料事実に至りては、すべて拠る所ありしものと認むべし、〔中略〕かくて伊佐にいつまでおはせしにや、新拾遺に収められたる行朝朝臣の歌の題詞に「常陸国に侍りける時よめる」とあり、歌詞に「かりそめと思ひし程に、住馴れにけり」とあれば、二三年間、筑波山下の地に羈旅〔きりょ。旅行〕せられしこと確たり、然して後年奥州へ還られたることをも証すべし、』

注(1)　p. 87の注(3)参照。

注(2)　p.49の注(2)後段参照。

注(3)　p.74の注(1)参照。

注(4)　p.110の注(4)参照。

注(5)　p.118の注(4)参照。

注(6)　「宮城県史」2に『中興の英主吉村　綱村には一男一女があったが、いずれも幼死したので、伊達吉村が黒川郡宮床伊達家から入ってその跡をついだ。吉村ははじめ村房といい、童名を卯之助、のちに助三郎と称した。黒川郡宮床の領主伊達肥前宗房の長子で、母は片倉小十郎景長の娘松子、延宝八年〔1680〕六月二十八日黒川郡宮床で生れた。元禄八年〔1695〕十二月二十六日綱村の世子となり、藤次郎と称した。翌九年十一月二十六日江戸城において元服、将軍綱吉から一字を賜わって吉村と称し、従四位下侍従越前守に任ぜられた。時に年十七。元禄十五年四月二十六日、久我従一位内大臣通誠の女貞子（冬姫、実は通誠の兄従三位権中納言通名入道知石静斎の第二女）と結婚した。元禄十六年（一七〇三）八月二十五日襲封、二十六日陸奥守、十二月二十一日左近衛権少将

に任ぜられた。正徳元年〔1711〕十二月十八日従四位上左近衛中将に進んだ。吉村の治世は、元禄十六年八月から寛保三年（一七四三）七月病のため退くまで満四十年の久しきに及ぶが、その間吉村は「天資英悟、勇武ニシテ人ヲ侮ラス、恭倹ニシテ能ク人ヲ恵ミ、神ヲ崇ミ、儒ヲ信シテ仏ヲ廃シ給ハス、公事ヲ疎ニシ賜ハス、政事惟(タダ)勤メ給フ」（「獅山公治家記録」）とあるように、非常な熱意をもって仙台藩の内政改革に当り、一門衆の反撃をよく抑えて財政の再建に全力を尽し、文武を奨励し、綱紀粛正、士気振作につとめ、産業の振興をはかった。このような吉村の治績は当時幕府でも高く評価され、八代将軍吉宗は吉村を評して、「段々国元の仕置又は行跡等聞かせられ候に、当時陸奥守程に折入吟味諸事申し付け、一分の慎等も、外にはこれ無き程」と感歎し、さらに夫人（久我氏）をも「殊の外、人柄勝れ、女には珍敷(めずらしき)」人であるとその賢夫人ぶりを賞揚している（「伊達家文書」六－二四四五）。こうして前代の末に窮乏のどん底におちいった仙台藩は、吉村の代でようやく救済され、仙台藩の歴史では比較的に安定した時期を生み出したのであって、吉村は後世から「御中興の英主」といわれた（「伊達家文書」九佐伯是保意見書）。〔中略〕吉村は隠居して八年後の宝暦元年（一七五一）十二月二十三日、病がにわかにすすみ、翌二十四日七十二歳の生涯を終った。法諡は続燈院殿獅山元活大居士、大年寺に葬られた。前将軍吉宗も吉村に先立ってこの年六月二十日に六十八歳で死んだ。』とある。p. 174の注(4)をも参照。

資料　大日本地名辞書（吉田東伍）

160.　山南敬助は仙台の脱藩者かどうか

問　新選組(1)の幹部山南敬助は、仙台の脱藩者であるといわれていますが、果してそうでしょうか。随分調べましたが、全然きめ手が見つかりません。

答　山南敬助〔やまなみけいすけ〕について、仙台の脱藩者であるとか、仙台出身者であるとか書き記したものは少くありません。主なるものに当りますと、

1.　「幕末維新人名事典」（奈良本辰也他）『山南敬助　天保5（1834）－慶応元（1865）。新選組隊士。北辰一刀流(2)の免許皆伝の剣客。仙台藩を脱藩したのち、試衛館道場に他流試合を挑んで敗れ、近藤勇(3)に入門した。新選組創設と同時に隊士となり副長をつとめる。ついで文久3年（1863）9月の芹沢鴨一派暗殺の折には、原田左之助とともに平山五郎を斬殺し、新選組のナンバーツーに相当する総長の地位を獲得した。しかし、土方歳三(4)〔ひじかたとしぞう〕との折